

# 第17回 河川生態学術研究発表会

水循環・まちづくりグループ 研究員 伊藤 将文

## 1. はじめに

平成26年11月12日に発明会館ホール（東京都港区）にて第17回河川生態学術研究発表会が開催されました。

本研究発表会は、河川生態学術研究会と応用生態工学会の共催によるもので、生態学と河川工学の研究者が一堂に会して川のあるべき姿を探ること、生態学的な観点からの河川に係る研究活動を推進することに加えて、新しい河川管理に資する総合的な研究を進めることを目的としています。

今年度の発表会では、個別河川流域をフィールドとした3つの研究グループと各研究グループの研究成果の関連分野を掘り下げて議論をする河川総合研究グループの成果発表が行われました。

また、研究グループの成果発表を踏まえた総合討論を行い、学識経験者や河川に係る関係者による意見交換と情報共有を行いました。

## 2. 発表会の内容

### ○口頭発表

各研究グループより研究概要報告及び最新の研究の成果報告が行われました。

#### 口頭発表テーマ一覧

<b>1. 斐伊川研究グループ</b>	
斐伊川グループ 成果概要	山室 真澄（東京大学大学院 教授）
・ 宍道湖における浅場整備が湖内の濁度と与える影響	矢島 啓（鳥取大学大学院 准教授）
・ ヤマトシジミ幼生の成長と着底および生残に与える餌料藻類の影響	南里 敬弘（東京大学大学院 特任研究員）
<b>2. 十勝川研究グループ</b>	
十勝川研究グループ 成果概要	中村 太士（北海道大学大学院 教授）
・ 支流一本流の連結性および多様性が河川性魚類に及ぼす影響	小泉 逸郎（北海道大学大学院 助教）
・ 陸域動物にとっての河畔林：森林ネットワークに着目して	赤坂 卓美（帯広畜産大学 助教）
<b>3. 菊池川研究グループ</b>	
菊池川研究グループ 成果概要	島谷 幸宏（九州大学大学院 教授）
・ 地質と山地渓流の河床形態の関係	佐藤 辰郎（九州大学大学院 助教）
・ 地質の違いがもたらす渓流生物群集の違い	一柳 英隆（熊本大学）
<b>4. 河川総合研究グループ</b>	
・ 樹林覆・流況・地形の変遷と現状把握に向けた広域解析	萱場 祐一（(独)土木研究所 自然共生研究センター長）
・ 河川地形の現況・変遷把握の探索的試行	根岸 淳二郎（北海道大学大学院 准教授）

### ○ポスター発表

ポスターセッションは、コンテスト形式で7件の発表が行われ、国土交通省帯広開発建設部の武田淳史さんによる「ダム放流を活用した札内川で

の礫河原再生の取り組み」が、特に高い評価を得て最優秀ポスターに評されました。

#### ポスター発表テーマ一覧

<b>1. 十勝川研究グループ</b>	
・ 湿地ネットワークの構造と空間スケールがイバラトミヨ個体群に与える影響	石山 信雄（北海道大学大学院 学術研究員）
・ ダム放流を活用した札内川での礫河原再生の取り組み	武田 淳史（国土交通省 帯広開発建設部）
<b>2. 斐伊川研究グループ</b>	
・ 宍道湖産植物プランクトンの培養株保存とその応用研究	大谷 修司（鳥根大学 教育学部 教授）
・ Ecological significance of turbulence in reed community (Phragmites japonica); Case study Lake Shinji, Japan	Keerthi Sri Senarathna Atapaththu（埼玉大学大学院）
・ 宍道湖の浅場造成地における堆積環境	安部 雄大（東京大学大学院 修士）
<b>3. 菊池川研究グループ</b>	
・ 樹林覆・流況・地形の変遷と現状把握に向けた広域解析	萱場 祐一（(独)土木研究所 自然共生研究センター長）
・ 河川地形の現況・変遷把握の探索的試行	根岸 淳二郎（北海道大学大学院 准教授）

### ○総合討論

総合討論においては、主に十勝川及び河川総合研究グループの研究テーマに係る「河川領域の樹林化」と十勝川、斐伊川、菊池川研究グループの研究発表に基づく「エコロジカルネットワーク」の2つのテーマに焦点があてられた他、河川生態学術研究会の研究の今後の発展性や成果の応用に関しても聴講者を含めた活発な意見交換が行われました。

例えば、シロザケが産卵時期により砂州の上下流で産卵場を変える事象は、地下水の湧出・伏流に伴う水温の差異が関連すると考察されています。

このような研究成果を踏まえて、将来の研究の方向性として、表流水のみならず地下水の流動を含めた水循環の視点の必要性が示唆されました。



研究発表会開催風景

## 3. おわりに

本発表会は各研究グループが一堂に会し、河川環境の保全・再生に関わる科学的な示唆を与える情報交換の場として、今後より一層重要な役割を果たしていくものと考えています。